

<大嘗祭（だいじょうさい）>

大嘗祭は、即位に際し、天皇が初めて新穀を食（め）され、皇祖及び天神地祇に供し奉る儀式で、一世一代の特別な新嘗祭（にいなめさい）である。その詳しい内容を、主に『神社のいろは 要語集 祭祀編』（扶桑社）から紹介し、独自の考察を加える。なお、このテキストは『神道要語集 祭祀編』（扶桑社、宗教編と祭祀編がある）が基本となっており、神職ならば当然知っておくべき祭祀知識がまとめられたものである。

1：序

延喜式では祭祀を大祀、中祀、小祀に分けているが、大祀は大嘗祭のみで、最も重要な儀式と言える。

大嘗祭では悠紀（ゆき）国と主基（すき）国が卜定（ぼくじょう：亀卜（きぼく）により占って決定すること）に依り決定される。両斎国の文献での初見は、天武天皇2年条の播磨・丹波だが、同じく5年9月条では、新嘗のためのものではあるが斎忌（ゆき）は尾張国、次（すき）は丹波国に卜定され、聖武天皇の御代には丹波国が悠紀になっている例もある。光仁天皇の御代から大方、都を中心として東西となり、悠紀は三河国、主基は因幡国、その後、宇多天皇の御代から悠紀は近江国に固定され、醍醐天皇の御代からは主基は丹波国ないし備中国からとなり、後鳥羽天皇以後は丹波国と備中国を交互に充て、幕末に至る。その起源は日本書紀に記載のある「天狭田（あまのさなだ）、長田（ながた）」や「狭名田（さなだ）、淳浪田（ぬなた）」にあると思われる。

以下、大嘗祭の大きな流れである。

- ①両斎国の卜定（4月）
- ②拔穂行事（9月）
- ③北野斎場行事（白酒（しろき）・黒酒（くろき）の謹醸、御贄の調備、神服調整、10～11月）
- ④御禊（ごけい、10月下旬に賀茂河原行幸）
- ⑤造殿行事（祭日前10日）
- ⑥供神物の供納（卯日当朝、斎場・大嘗宮）
- ⑦大嘗宮悠紀殿主基殿の儀（卯日夜～翌暁）
- ⑧節会（辰巳午日）

<斎田の意味>

“狭い田”や“長い田”は現在の棚田でも見られるように、基本的に低地に於ける田ではなく、山間部に於けるものである。それは、この国に於ける稲作当初、大規模な灌漑設備が整っていなかったため、統一王国ができてからは、多くの民を安定して養う必要性が生じたために、低地に於ける灌漑農法が考案され、発達したのである。その灌漑設備として大きな役割を果たしたのが大規

模な古墳群である。これらは各地方の大王や有力者の力を示すものでもあるが、その主たる目的は、古墳の周囲に濠をめぐらし、灌漑用水をもたらすことにあった。

その統一王国とは、丹後の海部氏が大王家として治めた邪馬台国（やまのくに）に他ならない。故に、いずれの斎国も海部氏縁の地なのである。これにはまた、本格的な水耕式稲作をもたらしたとされる徐福の渡来も考慮する必要がある。詳しくは以下の＜日本の真相 5＞＜日本の真相 6＞を参照頂きたいが、徐福は海部氏に婿入りして葛城氏の祖となり、海部氏の兄弟分家である尾張氏と共に祭祀を行っていた。その王国こそ、邪馬台国である。

<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-category-3.html>

卑弥呼が女王として統治した初期の邪馬台国は都祁野～泊瀬付近にあったと推測され、そこは山間部なので、山間部に於ける“狭い田”や“長い田”である。そこを「天＝高天原」と見なすなら、卑弥呼はまさしく天照大神のモデルである。

また、“名”は宇宙の原理に関わる重要なキーワードで、その真理は“眞名井”にあり、“淳”は（勾）玉のことで、いずれも海部氏との深い関係を暗示している。（なお、“淳”は黄金の暗示でもある。）

播磨、丹波、尾張、三河、因幡、近江、備中いずれも海部氏の丹後に関係が深い地域であり、それは丹後から稲作が広まったためである。

以下、前述の大嘗祭の流れに従って紹介・考察する。

2：拔穂使と造酒童女

拔穂使は8月上旬に発遣される。その使は宮主（みやじ：神祇官（じんぎかん）に置かれた宮中祭祀を司る職員）1人、卜部（うらべ）3人の4人が充てられ、悠紀・主基両国で各2人であり、悠紀に宮主1人と卜部1人、主基に卜部2人が充てられた。卜部の1人を稲実卜部（いなのみ のうらべ）、もう1人を禰宜卜部（ねぎのうらべ）と言った。

使はその国に向かうと国司を伴って斎郡に参向し、まず大祓を行い、斎田と斎場を卜定する。その斎田は六段で、大田（おおた）とも言う。斎場の稲実殿地（いなのみ のところ）は田の西に設けられ、祭りの場であるとともに、神聖な作業の場でもある。斎田・斎場の各四隅には、木綿（ゆう）を付けた櫛を挿し立てて聖地の標示とし、殿舎の建築に取り掛かる。

殿舎には使政所屋（つかいのまつりごと どころのや）、使宿屋（つかいの どののや）、五間屋、造酒童女（さかっこ）宿屋、八神殿（はっしんでん）、高萱御倉（たかかやのみくら）、稲実殿、物部女等宿屋（もののべのおみならの どののや）の8棟が建てられる。それと共に、奉耕者の卜定が行われる。稲実公（いなのみ のきみ）、造酒童女、大酒波（おおさかなみ）などの15人である。

このうち、稲実公は御稻（みしね）のことを司る長であり、大田主とも言われ、地方の篤農家である。

造酒童女は当地の大少領の未婚女性だが、大嘗祭当夜の供御（くご）の御飯（おんいい）の奉炊に至るまでの一切の奉仕を行う。神宮の物忌（ものいみ）童女と同様、この童女が手を付け始めることが原則とされている。拔穂の場合には最初に穂を抜き、斎場の造営に際しては、まず忌鎌（いみかま）にて草を払い、忌鍬（いみくわ）にて掘り始める。御料材の伐採に於いても、忌斧（いみおの）にて切り始め、稲つきでも最初に手を付ける。

この造酒童女 1 人、稲実公 1 人（男）、大酒波 1 人（女）、大多米（おおためつ）酒波 1 人（女）、粉走（こはしり）2 人（女）、相作（あいつくり）4 人（女）、焼灰（はいやき）1 人（男）、採薪（かまごり）4 人（男）らを物部人（もののべのひと）とか物部女（もののべのおみな）と言い、斎場に宿泊する。これ以外に 300 人が採用され、斎田の奉耕や京への運搬に従事する。更に、歌人（うたびと）20 人、歌女（うため）20 人が採用され、卯日の当日、国司に率いられ、大嘗宮の前で国風歌（くにぶりのうた）を奏する人たちである。

<物部氏>

物部氏は軍事だけではなく、本来は重要な神事に携わる祭司一族であることが伺える。かつては牛の生贄を捧げた神殿が多かったが、本来の犠牲を捧げる神殿はエルサレムだけであることから、最終的に権力を握った秦氏によって犠牲は禁じられた。すなわち、“牛に勿れ”と書く祭司部民だから“物部”なのであり、犠牲を禁じられると共に、特定の地域に押し込められた。それが、いわゆる“部落＝不可触民の村”の始まりである。

牛を犠牲にする際には必ずその血で穢れるわけだが、それは唯一、祭司のみに許された。従って、四足の獣や皮を扱う者たちは、卑しい身分などではなく、封印された古代の祭司氏族なのであり、部落問題を解決せずして、この国が世界の盟主足り得ることは無い。

<物忌>

神宮の物忌童女が奉仕するのは、現在では遷宮諸事の中でもとりわけ重要なものだけだが、かつては童男と共に子良（こら）と呼ばれ、第二次性徴を迎える前の子供たちが御正殿並びにその直下の心御柱周囲の清掃や、神事に於ける玉串奉奠などに御奉仕していた。（彼らの父が神官。）

その原型は、この国が大邪馬台国として統一された時、卑弥呼の 13 歳の宗女トヨが女王の座に就き、父の神官が補佐したことにある。それはすなわち、海部氏の巫女と神官の関係である。

また、造酒＝酒造りの元も海部氏の丹後にあり、神宮の御酒殿（みさかどの）は丹後からの勧請である。

3：拔穂行事

9月に入ると、吉日を選定して拔穂の儀が斎行される。儀に先立って水際で大祓が行われ、その後、御田に入って稲穂を抜き取る。まず造酒童女、次に稲実公、酒波、物部の男女の順である。最初に抜いた4束を御供の料として高萱御倉に納め、それ以外は白酒・黒酒の料として稲実殿に納める。高萱御倉は内宮の御稲御倉（みしねのみくら）のような構造である。

拔穂が終わると、八神殿にて祭典が行われる。この八神は御歳神（ミトシノカミ）、高御魂神（タカミムスビノカミ）、庭高日神（ニワタカツヒノカミ）、御食神（ミケツカミ）、大宮売神（オオミヤノメノカミ）、事代主神、阿須波神（アスハノカミ）、波比岐神（ハヒキノカミ）である。

稲は斎場で乾燥された後、御稲韓櫃（みしねのからひつ）と竹籠に納められ、擔夫（もちよおろ）300人が担いで京に運ぶ。韓櫃と籠にはいずれも木綿が付けられており、行列は御米を中心として、禰宜ト部と木綿蔓（ゆうかずら）を着けた稲実公などが前を進み、造酒童女は輿に乗って供奉し、稲実ト部が後ろを進む。そして、9月下旬に京に入り、大麻（おおぬさ）と塩湯（えんとう）で修祓を受け、斎場の竣工まで一時、外院の仮屋に納められる。

<八神殿の神々>

・御歳神

豊作の守護神。スサノオと神大市比売（カムオオイチヒメ、大山祇神の娘）の間に生まれたとされるが、スサノオは海部氏系、大山祇神は縄文アマ系であり、豊作の守護神＝豊穰神だから、結局は豊受大神と同義。

・高御魂神

造化三神の一柱。

・庭高日神

庭を照らす日の意。屋敷の神。御歳神の子だから海部氏系。

・御食神

食物を司る。古事記ではオオゲツヒメに相当するが、日本書紀では大年神＝御歳神の系譜に於いて、ハマトの妻として八神を生んだ、との記述がある。話としては混乱しているが、御食神の根源は海部氏の豊受大神。

・大宮売神

織物と酒造を司る。太玉命（フトダマノミコト）の娘とされるが、食物・穀物を司る女神である若宮売神（ワカミヤノメノカミ＝豊受大神）と共に丹後の大宮売神社で祀られており、丹後は機織りや酒造りの起源とも言える場所だから、海部氏系。

- ・事代主神

宣託の神。国譲りの事代主としては、ここに登場する意味が不明。一説にあるような、元々は葛城の田の神で、一言主の神格の一部を引き継ぎ、託宣の神の格も持つようになった神（Wikipedia）と見なせば、田の神ということで、御食神と同義。

- ・阿須波神

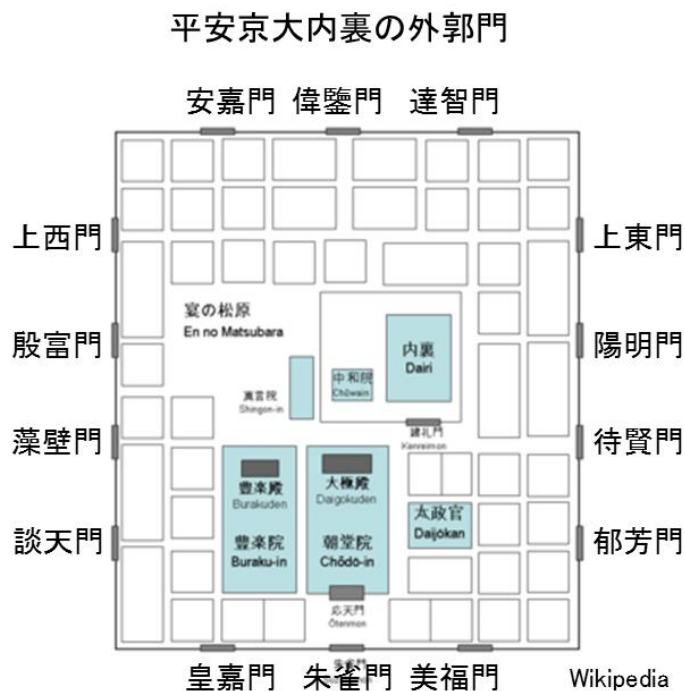
屋敷の守護神。御歳神とアメチカルミズヒメとの間に生まれた神々の一柱。古事記にしか登場しない、ほぼ正体不明の神だが、御歳神系ならば海部氏系。

- ・波比伎神

足元を守る神であり、旅の神。御歳神の子。御歳神系ならば海部氏系。

結局、高御魂神を除き、海部氏系の豊受大神由来の神々と言える。しかし、籠神社の極秘伝“天御中主神 亦名 豊受大神 亦名 天照大神”からすれば、高御魂神は豊受大神又は天照大神に相当し、海部氏系の神と言える。

4：北野斎場



北野斎場は宮城（きゅうじょう：皇居）の真北の位置である。平安京大内裏（だいだいり）の北面する外郭の真ん中にあった偉鑒門（いかんもん）から80丈（約242メートル）の地で、内院と外院に区切られた斎場である。外院は斎田の稲が京に到着するまでに建てられ、内院はその到着後、両国の国司によって造営される。

まず地鎮祭が行われ、ト食（うらはみ：亀の甲を焼いて生じる筋目で占う）された野や山に入り、野の神を祭って萱を刈り取り、山の神を祭って料材を伐採する。

それらを内院に搬送し、更に大祓を行ってから着工する。神宮式年遷宮に於ける山口祭や御杣始（みそまはじめ）祭と同様である。

内院には八間神座殿（やまのかみのくらのとの）、高萱片葺御倉（たかかやのかたぶきのみくら）、稲実殿、倉代殿（くらしろのとの）、御贄殿（みにえとの）、鋪設殿（もうけのとの）、黒酒殿、白酒殿、麴室屋（かむたちのむろや）、大炊屋（おいしいのや）、臼殿（うすのとの）が設けられるが、ここでは御飯（おいしい）を除く白酒・黒酒をはじめ阿波・淡路・紀伊の3国からの海産物（御贄）の調理と収納が行われる。

内院の南には神服院（かむはとりのいん）が建てられる。神服（かんみそ）調整の院であり、そのための神服女（かむはとりのおみな）の宿屋も建てられる。ここでは、繪服（にぎたえのみそ）が奉職される。繪服は「和妙（にぎたえ）」の神服で、三河の赤引糸で織られる。これは、三河国に発遣された神服使が捧持し、卜定された織部の長2人と織女（おりめ）6人、工人（てひと）2人の計10人を率いて京の斎場に至り、悠紀・主基それぞれに5人を充てて奉職させる。

一方、亀服（あらたえのみそ、荒妙）は阿波国の三木一族が麻を栽培して織り上げ、神服使が京に捧持して神祇官に納められる。繪服は卯日の夜、他の供神物と共に斎場を出発し、神祇官から出発した亀服と途中で合流し、大嘗宮の神座に奉安される。

大嘗祭に於いて和妙・荒妙が奉られることは、神宮に於ける神御服祭（かんみそさい）と同様、天照大神が高天原に於いて自ら神服を織って神祭りされた伝承に基づくものである。

<繪服と亀服>

何かと特定一族が織り上げる亀服（麻）ばかり注目されるが、繪服（赤引糸とは“清浄な絹糸”の意）と対となってはじめて意味を成す。それは、現在でも神宮の神御服祭で見られるように、神のお召しになる御服であって、陛下がお召しになることはできないのである。

しかしながら、亀服は織り上げて調進されることからすると、その土地のエネルギーを含めて織り込むことが重要なかもしれない。

5：御禊

10月下旬、二条三条の河原に行幸して行われ、「河原の大祓」とも言われる。『江家次第（ごうけしだい）』に依ると、御手水、御麻一吻一撫、御贖物（おんあがないもの）折敷高坏2本供進（一本解縄散米一本人形）、宮主（みやじ）祓詞奏上、五穀を散ずる大炊寮となっている。要は、御贖物の縄を解いて米を散じ、人形（ひとがた）にて身を左右中と祓われる儀式である。

東山天皇の大嘗祭再興（1687年）以降は、清涼殿の東庭もしくは昼御座で行われ、明治の大嘗祭（1871年）でも宮殿内で行われている。大正と昭和も京都御所内の小御所（こごしよ）で行われたが、今上陛下は皇居宮殿「竹の間」で行われた。

6：造殿行事

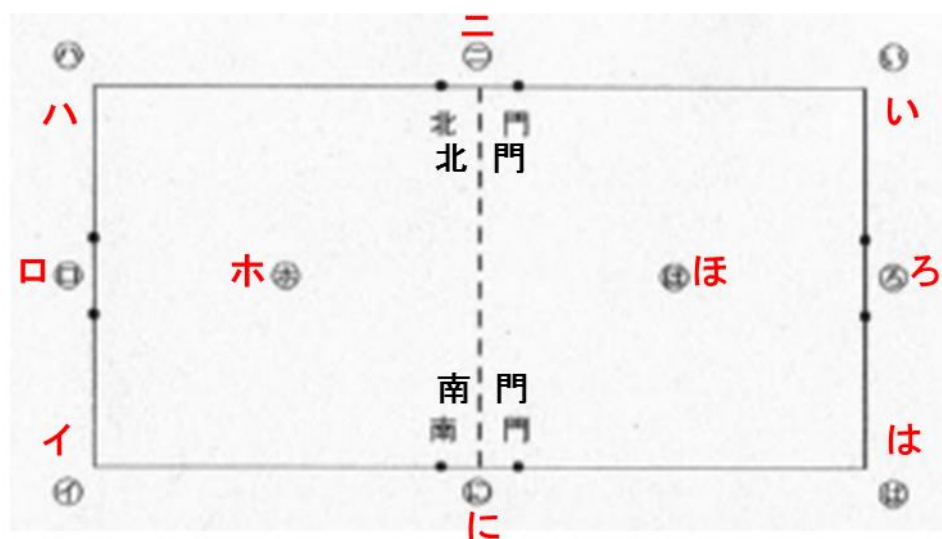
大嘗宮を建てる場所は、平安初期の平城（へいぜい）天皇の御代から大内裏の南中央に位置した朝堂院（ちょうどういん、八省院）の前庭にあった竜尾壇（りゅうびだん）の下であった。それ以前は、乾政官院（けんせいかんいん）や太政官院などである。朝堂院焼失後は、およそ旧地の竜尾壇の下に建てられた。明治の大嘗祭では皇居内の吹上御苑で行われ、大正・昭和の時は京都の大宮御所内の旧仙洞（せんとう）御所御所の御苑が充てられ、平成の大嘗祭は皇居内東御苑で行われた。

造殿行事はまず地鎮祭が「大嘗宮の儀」の 7 日前に行われる。祭員には神祇官の中臣、忌部並びに稲実ト部、禰宜ト部、悠紀主基両国の国司以下稲実公、造酒童女、灰焼などの雑色人があたる。夜の儀のため、まず童女が火を鑽り始め、稲実公が火を鑽り出し、灰焼が火を吹いて、国司や郡司の子弟が持つ松明に移す。その 8 人の子弟が松明を掲げて斎場に立ち、工人が東西 21 丈 4 尺（約 65 メートル）、南北 15 丈（約 46 メートル）を測って宮地（みやどころ）とする。これを半分に分け、東を悠紀院、西を主基院とする。

そして、稲実ト部が童女を率いて、宮地の四隅と中央、四方の門に食薦（すこも）を敷き、幣物と神饌を献ずる。その順序は図の通りで、「い」「ろ」「は」「に」「ほ」が悠紀、「イ」「ロ」「ハ」「ニ」「ホ」が主基の順序である。祝詞はト部が南門の内に入って奏上する。両国の童女が木綿を付けた櫛を捧げ、これから両殿が建つ四隅と、門が立つところに挿し立てて斎鋏（いみくわ）で 8 度穿（うが）つ。こうして地鎮祭が終了すると、諸工が一斉に建設に取り掛かる。

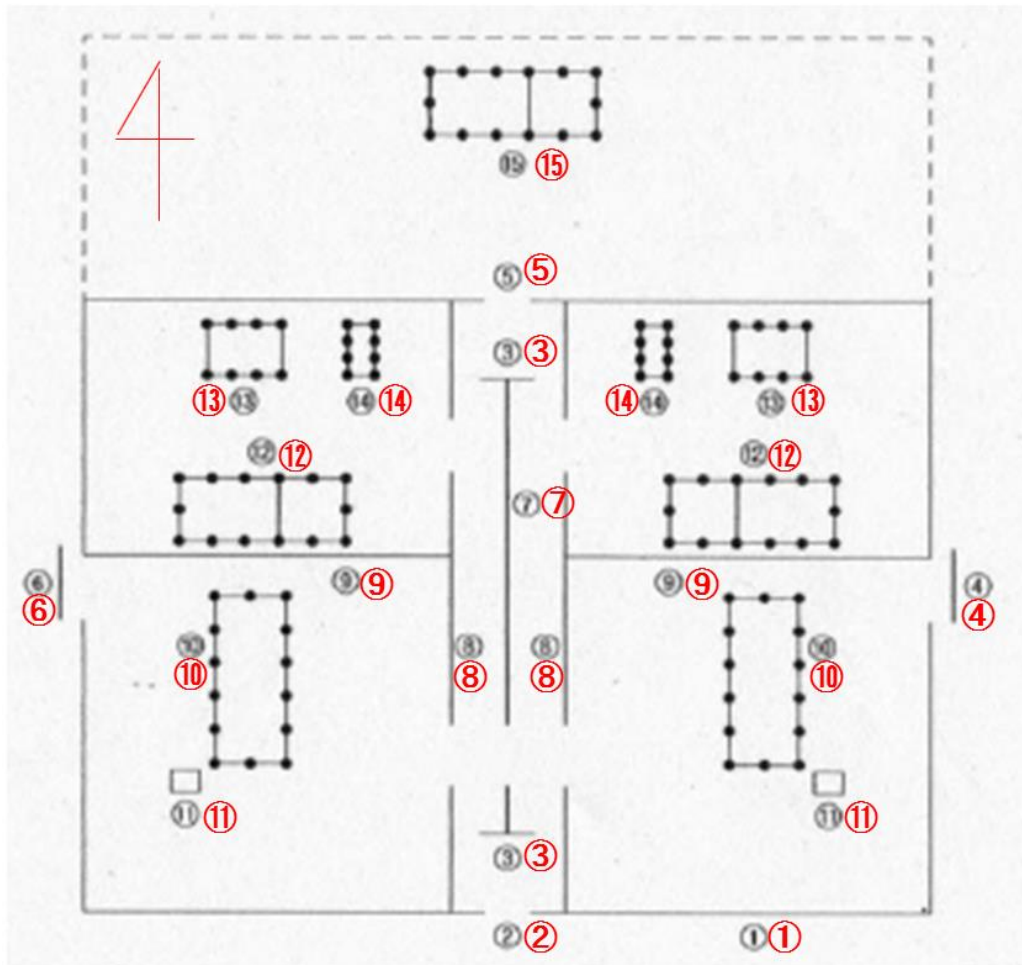
大嘗宮の様式は『貞観（じょうがん）儀式』と『延喜式』に詳細な記載がある。図は『貞観儀式』に依ったものである。

大嘗宮平面図-1



神社のいろは 要語集 祭祀編(扶桑社)

大嘗宮平面図-2



神社のいろは 要語集 祭祀編(扶桑社)

①宮垣、②正南（まみなみ）の門、③屏籬（かくしまがき）、④正東少北（まひがしよりすこしきた）の門、⑤正北（まきた）の門、⑥正西少北（まにしよりすこしきた）の門、⑦中籬（なかのまがき）、⑧悠紀主基の中垣、⑨中垣、⑩正殿（しょうでん）、⑪御厠（みかわや）、⑫膳屋（かしわでや）、⑬臼屋（うすや）、⑭神服柏棚、⑮廻立殿（かいりゅうでん）。

これらを祭日 3 日前までに、5 日間で竣工する。更に外院として、皇太子帳、親王帳、大臣以下参議以上帳、五位以上帳、小斎（おみ）の人（卜定によって選ばれた神事に奉仕する人）の帳などが祭日 1 日前までに建てられる。

正殿の様式は『延喜式』に依ると、南面妻入り、黒木作り、萱葺（かやぶき）屋根である。間取りは 2 室で、地に草を敷き、竹簀（たけのす）を置いて床とする。室（へや）と称する奥の間には、更に蓆（むしろ）を敷き、堂と称する

前室との間仕切りに蓆戸を設け、内側に帳として麻布を垂れる。奥の間の壁は草を芯として両面を蓆で化粧し、前室は壁の代わりに蓆障子を設け、外側に葦簾（あしのすだれ）を掛けたものである。このように、奥の間が薄暗い部屋であるのに対し、前室は開放的である。

竣工すると、宮殿に災害が無いように祈る大殿祭（おおとのほがい）や、上代に宮城（きゅうじょう）に入ってくる邪神を祓うために行われた御門祭（みかどまつり）が行われる。

<大嘗宮の造り>

祭日3日前までに、5日間で竣工し、終了後は取り壊すので、神宮御遷宮のような白木ではなく、黒木作りの簡素な建屋である。

帳として麻布を垂れるが、機能的な面もあるだろうが、どうも麻というのは重要である。麻はさまざまな動植物と共に、神々の星ニビルから下ろされたとされる。

7：供神物の供納

北野斎場の内院や神服院で調べられた白酒、黒酒、御贄、神服は、卯日の当朝、巳刻（午前10時頃）に斎場から出され、大嘗宮に供納される。その徒歩行列は総勢5,000人にも達する。この時刻、天皇は宮殿で大忌の御湯（おんゆ）を使われる。

この行列では一種の神籬（ひもろぎ）とも考えられる標山（ひょうのやま）が曳かれる。御飯の御料である御稻（みしね）は輿（こし）にて舁（か）かれ、造酒童女のみは輿にて供奉する。列に加わっている諸人は、賢木（さかき）や白杖（しらきのつえ）、青竹などの執物（とりもの）を手にし、供物の品々は日蔭蔓（ひかげのかずら）や草木、花などで飾られ、物を頭に戴く女もいる。行列の前部が神供の品々で、後部は両国からの貢物などである。

北野斎場を出発し、宮城の北から渡って来たこの大行列は、宮城の北門である偉鑒門前で左右に分かれ、悠紀は宮城東の大宮大路を、主基は西の西大宮大路を歩いて七条まで南下する。そして、中央の朱雀大路に向かって合流し、悠紀はその東側を、主基は西側を北上し、未刻（ひつじのこく：午後2時頃）に宮城の南門である朱雀門に達する。ここで、神祇官から出発して来た阿波の匳服が行列に加わる。そこから朝堂院の第一門である応天門を経て、第二門の会昌門に入り、行列の前部と後部に分かれる。前部はそこで神祇官の祓を受け、その先導に依り大嘗宮へと向かう。後部は会昌門前で停止し、その捧持してきた品々は翌朝までに豊楽院の庭上に陳列される。

前部は大嘗宮の南門に至り、そこから悠紀は東に回る形で北門に向い、主基は西から回り込んで、再び合流する。その行進の前に、両国の神服の男女の一団が酒粕（さかかしわ、酒を飲むための器）を各膳屋に納め、行列が合流した後に、繪服と匳服が両殿の神座に奉納される。続いて、他の供神物や祭器具な

どがそれぞれの膳屋、臼屋などに納められ、供納の儀は終了となる。

その後、悠紀殿で供御の御稻の奉春（ほうしょう）が始められる。まず造酒童女が稻を春（つ）き、酒波以下が皆で春き終わる。この間に稻春（いねつき）歌が詠まれる。そして、古くから膳（かしわで）のことに携わってきた高橋・安曇の両氏が酒部（さかべ）・膳部を率いて御飯を炊き、神膳を調理して盛殿（もりどの：膳屋の一室）に備える。

<繪服と亀服>

繪服と亀服が両殿の神座に奉納されることから、これらは神がお召しになる服であって、陛下はお召しになれない。

<安曇氏>

海洋民・安曇氏は古くから膳に携わってきたというから、単なる海洋民ではない。すなわち、豊穰神を祀るからこそ膳に関われるのであり、その豊穰神とは豊受大神＝イナナである。つまり、海部氏と最高神を同じくする。

高橋氏は第8代・孝元天皇の第1皇子、大彦命を祖とする一族で、いわゆる欠史八代だから、海部氏系大王の血統である。

8：大嘗宮の儀

内裏から廻立殿に渡御した天皇は、浴湯（ゆあみ）なさる。これを「御湯殿の儀」「小忌御湯（おみのおゆ）」と言い、この後、戌刻（午後7～9時頃）に祭服に着替えて悠紀の正殿に渡御なさる。御巫（みかんなぎ）、猿女（さるめ）、中臣、忌部が左右に前行し、大臣が天皇の直前を行く。天皇は菅蓋（すげかさ）を差し掛けられ、脂燭（ししょく）で足元が照らされる中を、徒跣（とせん：素足で歩くこと）で葉薦（はごも）の上を進みなさる。そして、悠紀の正殿にお入りになると、一旦、中戸の外に南面して著御（ちゃくぎょ）なさる。

次いで、伴（とも）・佐伯の両氏が南門を開き、群臣が会昌門から参入する。この参入の時、隼人が犬声（悪霊を祓う呪力があると信じられた蛮族の発声）を発する。そして、吉野の国栖（くず）に依る古風（いにしえぶり）、悠紀・主基両国の歌人に依る国風（くにぶり）、美濃・丹波・丹後・但馬・因幡・出雲などの語り部に依る古詞（ふるごと）が奏され、最後に隼人の風俗歌舞（くにぶりのうたまい）が奏される。

歌舞が終わると、皇太子以下が帳舎を出て庭中に跪き、まず皇太子が八開手（やひらで）を打って退下、続いて親王以下五位以上、六位以下の順で一斉に八開手を打って、五位以上は再び帳に着く。これらの次第から、南面の座は歌舞や拝礼を受ける座と言える。

その後、神膳を運び込む行立（ぎょうりゅう）となり、本儀中の本儀である天皇親祭となる。神前行立は亥刻（午後9時頃）に膳舎を発つ。その行列は以下の通り。

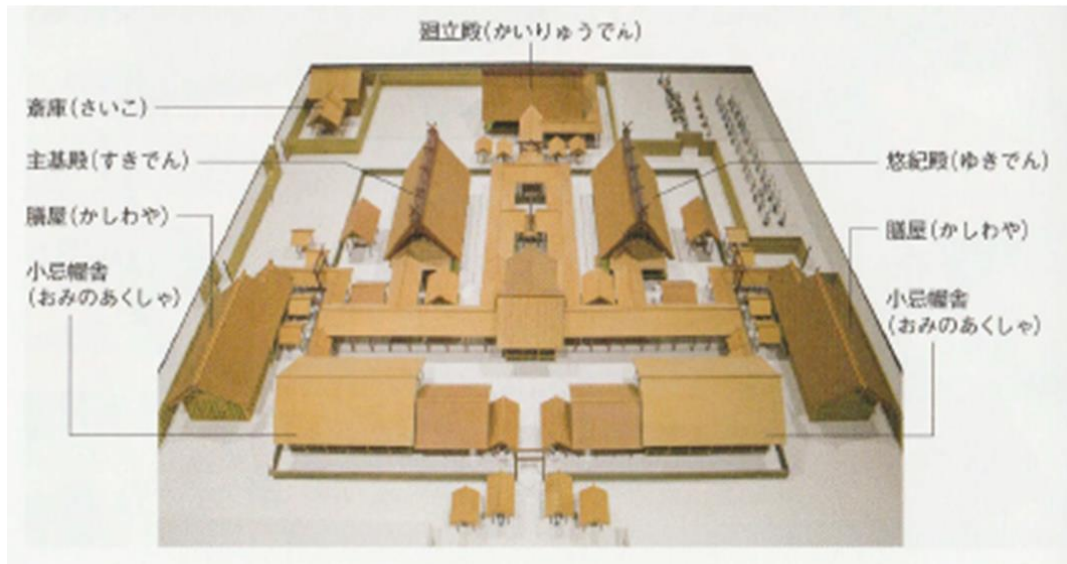
- ・脂燭：膳部の伴造（とものみやっこ）。
- ・削木（けずりぎ）：采女朝臣（うねめのあそん）。警蹕（けいひつ）を発する。
- ・竹杖（たけのつえ）：宮主ト部。
- ・海老鰯盥槽（えびのはたのあらいふね）：水取連（もいとりのむらじ）。
- ・多志良加（たしらか）：手水用の水を入れ、注ぐ器。水取部（もいとりべ）。
- ・楊枝筥（ようじばこ）：典水采女（もいとりのすけうねめ）。
- ・御巾筥（おんくなごいばこ）：典水采女。
- ・神食薦：陪膳采女。
- ・御食薦（みすごも）：後取（しんどり）采女。
- ・枚手（ひらて）筥：手長（てなが）采女。
- ・御箸筥：手長采女。
- ・御飯（ごはん）筥：手長采女。
- ・生魚（なまもの）筥：手長采女。
- ・干魚（からもの）筥：手長采女。
- ・菓子（このみ）筥：手長采女。
- ・蛸汁漬（あわびのしるづけ）：高橋朝臣。
- ・海藻（めの）汁漬：安曇宿祢。
- ・空盞（こうさん）：盃。膳部 2 人。
- ・御羹（おんあつもの）八足机：膳部 2 人。
- ・御酒（みき）八足机：酒部 2 人。
- ・御酒（御直会）八足机：酒部 2 人。

そして、采女十姫が殿内に入り、中戸口前まで進んで V 字型に雁列して控え、その他は殿内にとどまる。次に、典水采女 2 人が内陣に入り、御座に着いて御手水を供す。続いて、陪膳・後取の采女が入って、神食薦、御食薦を敷く。この後、後取采女は中戸口の所で、枚手筥以下を順次、手長采女から受けて陪膳に渡す。更に、南戸口に於いて、手長采女は高橋朝臣や膳部など内膳の 10 人から交互に汁漬以下を受けて後取采女に渡す。

こうして天皇の御親供、御直会の儀があり、直会が終わると、神饌の撤下も同じように行われる。そして、再び御手水があり、天皇は廻立殿に還御なされ、悠紀殿の儀は終了となる。この還御は亥 4 刻（午後 11 時頃）である。

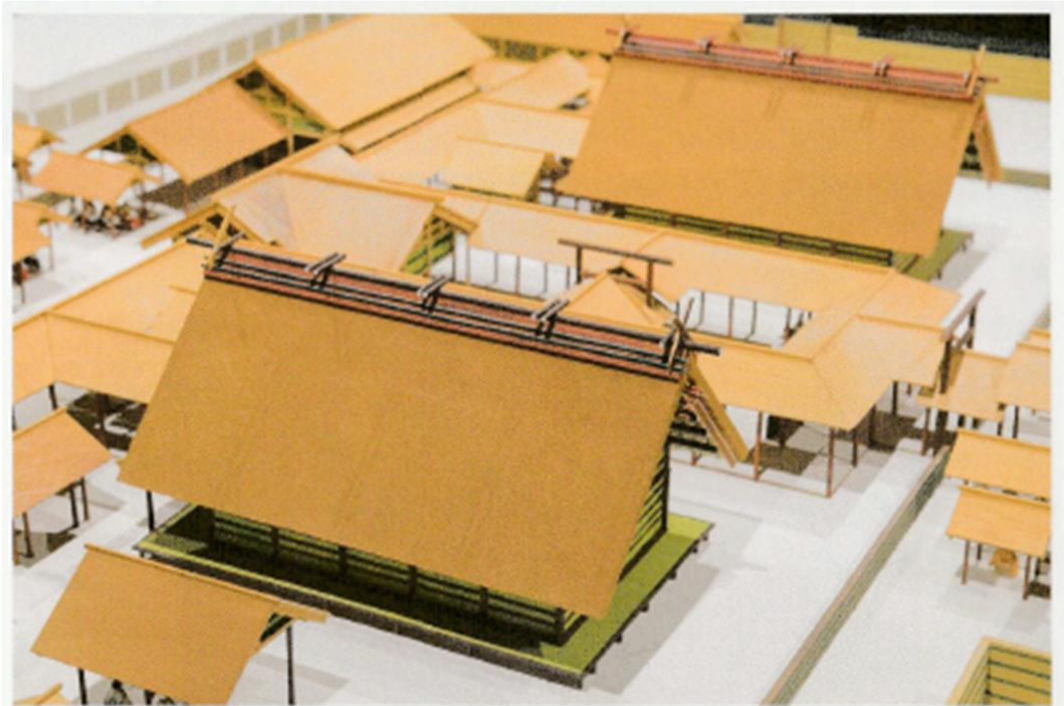
引き続き主基の儀となり、神祇官人は内膳の膳部などを率いて主基の膳屋に移り、悠紀と同様に稻舂より始めて神膳を調理する。天皇は丑 4 刻（午前 3 時頃）に主基殿に渡御なされ、悠紀と同じ次第で御儀をなされ、寅 4 刻（午前 5 時頃）の日の出に近い時刻に終了する。

大嘗宮模型-1(南側より)



神話のおへそ 古語拾遺編(扶桑社)

大嘗宮模型-2(東側より)



神話のおへそ 古語拾遺編(扶桑社)

＜天皇の御親供、御直会の儀の詳細＞

ここでは天皇の御親供、御直会の儀の詳細については触れられていないので、そこを補足・考察する。

①小忌御湯と天の羽衣

まず、これらの儀に先立って行われる浴湯について。大嘗祭では大変な潔斎が成されるが、とりわけ小忌御湯では、“天の羽衣”という衣を纏われて湯槽にお入りになり、湯の中に衣を脱ぎ捨ててお出になる。生（き）の明衣（あかは、みょうえ）を着用して水を拭われ、斎服にお着替えになって大嘗宮に向かわれる。悠紀殿と主基殿で二度儀式があるので、この小忌御湯も2回行われ、天の羽衣、生の明衣も2着ずつ用意される。

この天の羽衣は丹後の天女伝説に由来する。水浴していた天女は羽衣を脱いで水浴したがために、天上に帰れなくなった。対して、大嘗祭では天の羽衣を着て水浴する。水浴は神聖な禊であり、その場で天の羽衣をわざわざ纏われるということは、天上界の力を身に纏うということである。それにより、神と直接対峙して神祭りすることが許され、天子の威霊を体得するのである。この天女とは、根源神たる丹後の豊受大神の暗示である。

それを証明するような歌がある。万葉集・巻1-28にある持統天皇の歌である。（関裕二著、『「女帝」誕生の謎』、講談社。）

“春過ぎて 夏来にけらし 白袴（しろたへ）の 衣ほすてふ 天香具山”

天香具山は聖なる山のはずなのに、洗濯物が干してあることなどおかしい。天香具山の土が重要な呪具として用いられ、神武東征時に天香具山の土で天平瓮などを作り、天神地祇を祀り、敵を呪ったところ、敵は自ずから平伏した。つまり、天香具山を手に入れた者がヤマトの王になれたのである。これは、天香具山＝天香語山（眞名井原）の土はヤマトの国の物実（ものごね）で、ヤマトの国の魂そのものだからである。その原型はシュメールで、王権のあった場所が聖別され、そこの土にエンリルが“天空のように明るい物体”を埋め込み、それが転じて“輝く玉”となり、玉が王権の象徴となったのである。

だから、この歌では衣を干したのではなく、実は“天女＝豊受大神の天の羽衣を手に入れる”ことを宣言していたのであり、ここで詠われている“衣”とは“天の羽衣”のことなのである。言い換えれば、王権の象徴とも言える天香具山の土を手に入れ、神祭りが許される“天の羽衣”を纏うことにより、名実共に祭司王となる願望を詠っているのである。

②拍手の作法

皇太子、親王以下五位以上、六位以下の順で一斉に八開手を打つ。八開手とは、現在神宮の祭祀でも行われている八度拝である。

すなわち、最も重要な儀式では八開手を打つ。これを、明治以降簡素化したものが、二拝二拍一拝である。

③天皇親祭の重儀

天皇の御親供、御直会の儀は、言わば秘儀である。以下、神社新報第 3049 号及び神社新報第 3429 号の國學院大學教授・岡田莊司氏に依る詳しい考察を紹介する。

◆神社新報第 3049 号

平安時代など、天皇が幼い場合は天皇に代わって摂政がいろいろ執り行うが、大嘗祭も例外ではなかった。そうすると、摂関家は、大嘗祭の式次第についても知っておかねばならず、知らなければ摂関家としての資格が無い、とまで言われ、鎌倉時代には摂政を解任されることもあったという。

例えば、摂関家の二条良基が記した『永和度大嘗会記』には“神膳の次第は人の知らぬ見ぬ事なれば、しるし申すに及ばず、天神地祇を天子の手づから祭らせ給て、神供を供え給ふとぞ受け給はる”としている。つまり、天皇が御親（みづか）ら天神地祇をお祭りし、神饌をお供えする。そのお供えの仕方は、天皇のみが知ることである、ということである。

神祇官で亀の甲羅を焼いて占いをし、神官家として発展した卜部氏が記した『宮主秘事口伝』にも“神饌供進、第一之大事也、秘事也”とあり、神饌の供進が最も重要で秘儀である、と言っている。

関白家・一条兼良は『代始和抄（だいはじめわしょう）』で“卯日は神膳を供せらる、其儀ことなる重事たるによりて委しるすに及ばず”とし、神饌が最も重要で詳しく記すことができないとしている。そして、天皇しか知ってはならない儀式作法、しるすに及ばずという作法は、御食事を差し上げるための丁重な順番と詳細な作法のことである。また、“嘗殿と云は板敷を敷かず筵（むしろ）を敷く”とあり、大嘗殿は素朴で、神膳を供する所、御食事を差し上げる所である、と書いてある。

吉田神道を創始した吉田兼俱（カネトモ）も『代始和抄』の追文で“神膳御供進の次第は天子の御灌頂一朝の重事なれば、事々に秘事口伝にあらずと云事なし”とし、大嘗祭に於ける神膳の供進の次第は重事であり、これら 1 つ 1 つが秘事口伝としている。そして、“主上手づから親ら盛り給ふに、ことさら御口伝のある事とも、深き子細あり”とも記しており、やはり天皇が御親ら神饌をお手盛りされること自体が秘儀なのである。しかし、いわゆる真床御衾（まどこおふすま）に関する記述は一切無い。

また、大嘗祭の具体的な内容は、宮内庁書陵部が平成元年 3 月に刊行した『図書寮叢刊』に採録され、初めて活字で公開された『大嘗会卯日御記』からも伺える。例えば、4 歳の崇徳天皇の大嘗祭について摂政・藤原忠通が書いた記録に神膳供進の式次第が詳しく出てくるが、やはり真床御衾の儀式については一切記されていない。

大嘗祭では天照大神と天神地祇をお迎えすると思われるが、天照大神だけは天皇が御親らお祭りする神だった。神膳を進める所作では「おお」と称唯（いしょう）する応答を、天皇御親らが行われる。『江家次第』には“天皇頗（すこぶ）る低頭す、拍手称唯す”とあり、『江記（ごうき）』には“天皇拍手少しく

低頭す、肅敬す、又稱唯あるべきかな”などの言葉が注記で入っている。称唯とは、宮中で天皇に召された官人が口を覆って「おお」と応答することで、下位の者が上位の者に対して行う服従の作法である。（本来は“しょうい”が正しい読みだが、“いしょう”と転倒して読むのは、“讓位”と音が似ているので、それを避けたものと言われている。）だから、天皇が臣下に対して行うことはあり得ない。天皇が行う場合は唯一、皇祖の天照大神に対してのみである。天皇は神迎えを行い、神に従う作法をするのが、天皇の神への真摯な作法である。天皇御親らが神になる作法ではなく、とにもかくにも丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしするのである。これこそが、天皇一世一代の大嘗祭の秘儀であり、現在の神道祭祀の作法に通じているのである。

◆神社新報第 3429 号

『後鳥羽院宸記』では、供えられる神饌のうち、**御飯には稲の他に粟もあることが挙げられ、これこそが「秘事」と書かれている**。天皇から天皇へ伝えられる作法の書に「秘事」と記されている意義は大きい。大嘗祭の意義とは、中央の神座で何かあるということではなく、主にお食事の作法と内容、特に粟の御飯が入るということだったと言える。

歴史的にも、地方税である租は神社の祝儀などにも用いられ、稲で納めるのが基本だった。一方で、稲の生育は天候に左右されるため、古代ではどうしても準備できない場合には粟で納めても良かった。また不作に備え、「義倉（ぎそう）」という穀物倉に粟を納めてもいた。

あまり指摘されないが、神話でも粟や稗（ひえ）などを陸田で作っていることが描かれている。粟はおいしくはないが、腹持ちのする食べ物で、飢饉対策には最も適していると言える。古代の人々が生きていく場合、稲が大事なのはもちろんだが、粟を以て代用してきたことにも目を向ける必要がある。

現在、天皇陛下には御所で稲だけでなく粟も育てられているという。新嘗祭にも大嘗祭にも稲と粟が用いられることは、古代から一貫している。天皇が大嘗祭で稲と共に粟も食されるのは、「おおみたから（百姓）」である国民が、稲だけではなく、粟も食べていかないと生きていけなかったからではないかと考える。故に、稲の祭りと共に、今では食べている人はほとんどいなくても、粟の祭りが行われているのである。

このように、岡田教授は述べられている。すなわち、**大嘗祭の秘儀とは、神饌としての粟と、決して間違えることの許されない神饌供進の手順に他ならず、それ以上のものでもそれ以下のものでもない**、ということである。

ここで、秘儀とはされているものの、手掛かりとなるのが新嘗祭である。大嘗祭は即位後初めての新嘗祭であることから、儀式としては基本的に同じはずである。詳しくは、以下を参照して頂きたいが、重要な部分を抜粋する。

<http://iyasaka369.blog.fc2.com/blog-entry-20.html>

陛下は御手水の後、神宮の方向の神座の御前に正座され、神饌を御親ら供さ

れる。枚手にピンセット型の竹箸を用いられ、古来の定め通りの順で供される。御親供が終わると御拝礼され、御告文（おつげぶみ）の奏上があり、皇太子は座を立たれ、母屋御扉口御幌前の拝座に着かれ、礼拝される。続いて参列者が正面階下で拝礼する。

御告文を奏されると御直会となり、陛下は御米飯、**御栗飯**、白酒、黒酒を聞き食（きこしめ）される。これは神人共食で、神と共に新穀を聞き食すことにより、新穀に宿る穀霊を体内に取り入れるわけだが、これは太陽の恵みを受けて育ったから太陽神の霊威であり、天照大神の皇孫ニニギノミコトとしての天皇霊威の更新に他ならない。故に古来、陛下が新穀を聞き食されるまで、庶民は新穀を口にすることはしなかったのである。

御直会の後は、陪膳采女以下の奉仕で神饌が下げられ、再び殿内の御座にて御手水の後、還御となる。

・ピンセット型の竹箸

古代インカでは、太陽神に使える巫女は毛抜き用ピンセットで陰毛を抜かれ、搔把器で陰部を開いて太陽に向けられた。これは、太陽神の霊威を宿すというものである。この場合の太陽神は男神だが、古代インカでは中南米の最高神ククルカン＝ケツアルコアトル＝ニンギシュジツダであり、また、太陽神ウツでもある。日本も縄文時代は、環太平洋文明圏であった。

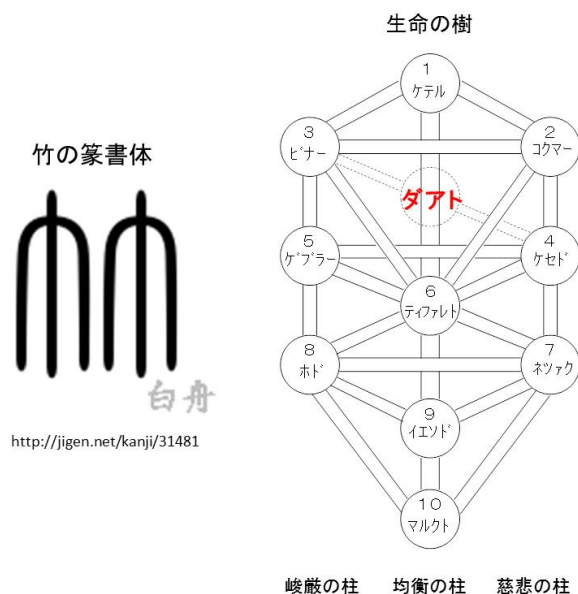
箸の話としては、大物主神が蛇だと判った倭迹迹日百襲姫（ヤマトトトヒモモソヒメ）が陰部を箸でついて死んだ話があり、陰部について死んだ話としては、天照大神あるいは機織り女の稚日女（ワカヒルメ）が機を織っていた時にスサノオが皮を剥いだ馬を投げ入れたのに驚いて梭（ひ）でホト（陰部）について死んだ話があるが、ともに陰部について死んだことに着目すると、倭迹迹日百襲姫と天照大神は同義と見なせる。倭迹迹日百襲姫はこの逸話から箸墓に葬られているとされ、それはまた卑弥呼とも言われ、卑弥呼は豊穰神（豊受大神＝イナナ）と共に太陽神（天照大神＝ウツ）を祀っていたことから、倭迹迹日百襲姫と天照大神には深い関係がある。

また古代、箸には使った人の霊力が（唾液によって）宿るとされたから、陰部を箸でついたことは男神との性的交わりを暗示し、ワカヒルメの話の“梭”は“日”に通じるから、これも男神の太陽神との交わりを暗示する。それは、太陽神の子＝日の皇子を宿すことをも意味する。そして、この機を織っていたのは新嘗祭の時、古代の新嘗祭はほぼ冬至の頃だった。冬至は太陽（神）の神威更新とされ、古代の新嘗祭は太陽神の霊威を新穀と共に頂くことにより天皇霊威を更新するという意味合いがあったから、そういう意味からしても、ワカヒルメの話は太陽神との一体化に依る霊威更新と言える。

ワカヒルメの話にはスサノオが関係しているが、そのスサノオが出雲に降りた時、斐揖（ひい）川の川上から箸が流れてきたことによって、人が居ることを知った。箸を流したのは、使った人の霊威が宿っているからで、他の人が使わないようにしたためである。そして、“ひい＝ひい＝日”で、これも太陽神を

暗示している。

また、竹は篆書（てんしょ）体は以下のように書くが、これは「生命の樹」の 3 本柱が「知恵の樹」と共に「合わせ鏡」になっている象形であり、様々な真相解く鍵“カバラ”の奥義の暗示である。すなわち、ピンセット状の竹箸は太陽神の霊威を授かることを暗示しており、その箸で供された新穀を神人共食することも併せて、日の皇子の証ということである。



なお、“天皇が御親ら神饌をお手盛りされること自体が秘儀”ならば、一体、誰が新天皇に大嘗祭での秘儀を伝授するのだろうか？それはおそらく、内陣に入る典水采女である。（陪膳采女もか？）新嘗祭でも采女が陛下の側で御用を勤め、日頃の宮中三殿内陣でのご奉仕も内掌典が務めることからすれば、妥当である。

④悠紀と主基

悠紀の神前行立は亥刻（午後 9 時頃）に膳舎を発ち、終了後の還御は亥 4 剋（午後 11 時頃）である。また、主基では、丑 4 剋（午前 3 時頃）に主基殿に渡御なされ、悠紀と同じ次第で御儀をなされ、寅 4 剋（午前 5 時頃）の日の出に近い時刻に終了する。かつての新嘗祭の夕（よい）の儀が午後 10 時頃、暁（あかつき）の儀が午前 4 時頃に成されていたことからすると、大嘗祭は新嘗祭の古儀そのものである。新嘗祭はかつて冬至の日没から忌籠って太陽神の霊が憑りつくのを待ち、陽がまったく果てた午後 10 時から深夜にかけて太陽神の霊威が籠る稲魂を頂いて霊性を養い、更に忌籠った上で、暁の頃に再び稲魂を頂いて霊性を完成し、太陽の復活と共に、若々しい日の皇子として顕現する、というものである。

そして、この夕と暁の両儀は、神宮神嘗祭の由貴夕大御饌（ゆきのゆうべの

おおみけ、午後 10 時）と由貴朝大御饌（ゆきのあしたのおおみけ、午前 2 時）に由来するが、暁の儀は神嘗祭の方が一足早い。その理由は、天皇が靈性を更新されるに先立ち、その靈威の根源である天照大神の神威が更新されなければならないからである。それは、崇神天皇の時代まで、宮中のみで天照大神が祀られていたことからすると、かつては神嘗祭と新嘗祭は一体の形で行われていたものと推察され、故に、天皇靈威の更新に先駆けて天照大神の靈威が更新されなければならないためである。

では、大嘗祭では何故、悠紀が優先されるのか？そもそも、悠紀とは神宮神嘗祭の由貴夕大御饌、由貴朝大御饌の“由貴”に由来し、由貴とは“齋忌（ゆき）＝最も清浄で立派な神饌”という意味である。そして、主基殿の“主”とは“主体”ではなく、“次のもの”という意味である。

神宮との対応からすれば、悠紀は（遷御を除いて）すべて優先される外宮に、主基は内宮に対応する。前述のように、深夜に太陽神の靈威が籠る稲魂を頂いて靈性を養うことは、食を司る豊受大神の外宮に相当し、暁の頃に靈性を完成して日の出（太陽の復活）と共に皇子として顕現することは、太陽神的な天照大神の内宮に相当する。外宮が豊受大神＝根源神を祀り、それ故に外宮先祭として優先されるならば、外宮に対応する悠紀もまた、内宮に対応する主基に対して先祭となる。

⑤ 僊服と真床御衾、粟

僊服と真床御衾に関して巷に流布している説（飛鳥昭雄氏の説）として、大嘗祭で陛下は僊服を纏い、真床御衾にくるまれて神の座で寝て起き上がり、それがイエスの“最後の晚餐→死→復活”の再現だ、というものがある。しかし、それならば、まず神人共食があつて後、これらの儀式があるべきだが、そうではない。

この秘儀説の元は、昭和の大嘗祭の際に折口信夫氏が神話と照らし合わせ、『國學院雑誌』の誌上で立てた説である。その神話の場面は、ニニギが高千穂に降臨する際、真床御衾に覆われて（あるいは着せられて）いたことである。そして、大嘗祭を行う大嘗殿の内陣中央には八重畳の上に白の御単・御衾（おふすま）が置かれた神座が用意されることから、特に昭和 40～50 年代の超能力やオカルトブームで秘儀説の注目度が高まった。しかし、折口氏の師である柳田国男氏は、そのような説を認めていない。

まず第一に、大嘗祭は悠紀と主基でまったく同じように行われる。仮に、真床御衾が折口説のようなニニギの天孫降臨の秘儀の場合である場合、1 回だけ行えば良く、2 回も必要無い。同様に、“最後の晚餐→死→復活”の再現ならば、これも 1 回だけで良い。新約と旧約の「合わせ鏡」だとしても、新約のイエスは復活しているが、旧約のヤハウェは死んでいないし復活もしていないので矛盾する。また、神饌を神に供した後、天皇は祝詞を奏上して神と直会を行い、供した神饌を天皇御親ら聞し食す。これは、“秘儀”が無事終了した後に成される御食事であり、御食事されてから“秘儀”を行うわけではない。つまり、“最後

の晩餐→死→復活”という順を再現しているわけではない。大嘗祭は確かに天皇一世一代の秘儀ではあるが、その本質は、新しく日の皇子になった天皇が、新穀を神に感謝すると同時に、丁重に神迎えし、天照大神をおもてなしして靈威を頂く特別な新嘗祭なのであり、それ以上の秘儀ではない。

第二は、亀服である。これは繪服と共に神座に奉納され、神がお召しになる服であって、陛下はお召しになることはできず、まして、神座は神が坐す場だから、陛下が立ち入ることは許されない。亀服については、亀服を調進している三木家第 28 代当主の三木信夫氏がまとめた内容が紹介されている。

http://park17.wakwak.com/~happyend/namiawa/anonamikaze/awa16/a16_03.html

“大嘗祭の中心行事は大嘗宮の儀で、亀服は入目籠に入れ、繪服は入細目籠に入れて神衣（かむそ）として悠紀・主基の神座に祀り、その他の神饌を供え、悠紀・主基の田の新穀をもって天照大神及び天神地祇を奉祭され、自らも食する等、天子の威霊を体得する為の神事の儀式です。

大宝律令の神祇令に「凡そ踐祚の日、中臣は天神の寿詞（よごと）を奏せ、忌部は神璽鏡剣（しんじのかがみつるぎ）を上（たてまつ）れ」とあるように、京師の忌部は大嘗祭の都度、皇位の印である鏡と剣を作り奉っていたのですが、1036 年、第 69 代・後朱雀天皇を最後に廃止となり、中臣の寿詞だけとなります。本来の八咫鏡は伊勢神宮で祀られ、天叢雲剣は熱田神宮のご神体として祀られています。

亀服とは、天皇が即位後初めて行う一世一度の大嘗祭においてのみ使用する、阿波忌部が織りあげた麻布の神服（かむみそ）を言うのです。亀服は天皇自身が着るのではなくて、天皇が神衣として最も神聖なものとして、天照大神にお供えする物です。上古より阿波忌部の氏人が製作するから亀服なので、忌部以外の人達が作成すれば、それはただの麻織物なのです。現在は 4 反ですが、昔はもう少し少なかった様です。”

やはり、亀服は天皇がお召しになるのではなく、神にお供えするものなのである。つまり、真床御衾は神が降臨する場、神座（上座に通じる）であり、神ではない天皇は入ってはならない、触れてはならない場所なのである。

また、大嘗祭は特別な新嘗祭なので、新嘗祭での母屋の舗設を見ると、神座、寢座、御座（陛下が座られる場所）があり、神座は黄端の短畳（たんじょう）、御座は白端の半畳で、神座と御座は相対して神宮の方向（現在は西南）に設けられる。寢座は神座・御座の東、母屋のほぼ中央に南北に敷かれる。薄帖（薄い畳）を何枚も重ね敷き、南に坂枕（さかまくら：薦（こも）で作られた頭を乗せる部分が斜めになっている枕）を置き、羽二重袷（はぶたえあわせ）仕立ての御衾が掛けられる。その端には女儀用の櫛、檜扇（ひおうぎ）、沓（くつ）などが置かれ、古くはこれを「第一の神座」と称した。

大嘗祭もこれに類しているはずであり、この寢座に掛けられる御衾を真床御衾と解釈するならば、この寢座の端には女儀用のしつらえが成され、神座と御

座は相対して神宮の方向に設けられるから、この新嘗祭で降臨する神とは、皇祖神で女神の天照大神をおいて他に無い。これが大嘗祭となると、悠紀は豊受大神、主基は天照大神なのだろう。

従って、“真床御衾の秘儀”などは存在し得ない。

三木氏に直接伺ったお話では、“神は亀服に降臨する”という。これが真実ならば、繪服は不要ということになってしまうので、その真意を考えよう。

大嘗祭に於ける神饌の秘儀は米と粟、特に粟にあり、神服は絹の繪服と麻の亀服である。本格的な稲作と絹は大陸からもたらされたとされるが、粟は稲作に先立ち栽培されており、また、麻は世界最古の繊維作物とされ、縄文時代の遺跡からも出土している。つまり、粟と麻は、米と絹に先立って栽培されていた衣食住を満たす重要なものであり、言うなれば、粟と麻は悠紀、米と絹は主基に相当する。

また、かつて米は貴重で、飢饉の時には粟で凌いだ。だから、米は高貴な方、粟は庶民に相当し、同様に、絹は貴重で高貴な方の、麻は庶民の服だから、米と絹は高貴な方、粟と麻は庶民のシンボルである。高貴な方の代表は天皇だから、これは言わば天皇と庶民＝国民の関係であり、日本は古くから天皇が親、民が子という大きな家のような君民一体の統治機構で、天皇は民（＝粟、麻）無くして存在し得ない。そして、亀服の麻が阿波のものに限定されるのは、阿波＝アワ＝粟の意味が込められているからである。

更に、三木氏に依れば、かつて籠神社の第 82 代宮司に祭祀をいろいろ教え、自らの邸宅内で祭る神の御霊は、邸宅の北東の部屋にあるという。北東はウシトラの方角だから、当然、この神はウシトラノコンジン＝豊受大神で、それを裏付けるかの如く、阿波という地名は豊穰神オオゲツヒメに因み、それは豊受大神に他ならない。そして、弥生海人大王家の血統の籠神社宮司に祭祀を教えたとなれば、阿波忌部氏である三木氏は弥生海人（＝邪馬台国）の祭司氏族であり、だからこそ、粟に繋がる阿波忌部氏の栽培する麻で縫製された亀服が重要で、これが“神は（麻の）亀服に降臨する”という真意であろう。

なお、絹や木綿は織りやすいが、麻は極めて織りにくく、織目が飛んでしまい、慣れない一族には困難である、とも言われていたので、それもまた、他の一族にはできない理由の 1 つだろう。

なお、三木家は御殿人（みあらかんど）という特別殿上人で、皇室から亀服作成を命令されるのではなく、依頼されることから、皇室とは対等の立場であり、従って、亀服は「献上」するのではなく「調進」するのである。

結局、外宮に相当する悠紀殿と、内宮に相当する主基殿の両方で同じ儀式を斎行する大嘗祭とは、豊受大神と天照大神は“二神一座、一神二座”の関係にあり、“豊受大神 亦名 天御中主神 亦名 天照大神”という籠神社の秘伝からすれば、皇祖神の天照大神と新穀を通じて根源神である豊受大神＝天御中主神の霊威を頂く儀式に他ならない。

9：節会（せちえ）

朝廷の饗宴を節会と言う。節会には元日節会、白馬（あおうま）節会、踏歌（とうか）節会、大嘗祭と新嘗祭の豊明（とよのあかり）節会などがあり、大嘗祭では辰日節会に続いて、巳日節会、午日節会が続行され、悠紀節会、主基節会、豊明節会とも称される。大嘗祭や新嘗祭は大嘗会・新嘗会とも書かれ、節会が重要な要素であったことが伺える。

特に、辰日節会には中臣の天神寿詞（あまつかみのよごと）が奏され、忌部によって神璽鏡剣が奉られた。

(1) 天神寿詞と神璽鏡剣

主基殿の儀が終了した辰日の午前 7 時頃には、悠紀主基両国の倉代（くらしろ）の雑物（くさぐさのもの）が豊楽院の庭中に陳列される。両国の御帳（みちょう）が豊楽殿上の東と西に設けられ、標山が殿前に移される。

主基の儀が終了し、大極殿に還御なされた天皇は、再び午前 6 時頃に発御し、一旦、豊楽院の清暑堂（せいしょどう）に留まりになり、辰 2 刻（午前 7 時半頃）に悠紀帳に出御なさる。すると、親王以下五位以上が版（へん：所定の位置）に着き、六位以下も続く。次に、皇太子が版に着く。いずれも位袍（いほう）の束帯を着用している。

場が整うと、神祇官の中臣が賢木を取って笏に副え南門より入って版に着き、跪いて天神寿詞を奏上する。そして、忌部が入ってきて神璽鏡剣を奉る。この中臣は、多くの場合、神宮の祭主が兼ねていた。

当時、踐祚（せんそ：天皇の位を受け継ぐこと）と即位（皇位に就いたこと）を明らかにすることとは分かれていなかったが、文武天皇の皇位継承は持統天皇からの譲位を受けての即位であったため、踐祚と即位が期日を別にして行われた。その後、光仁天皇から譲位されて踐祚された桓武天皇もこの例に倣い、踐祚から 13 日後に大極殿にて即位遊ばした。以後、これが慣例となり、踐祚の際に劍璽（剣と勾玉）が一旦、新帝に渡されることになった。これが、現在まで「劍璽渡御の儀（劍璽等承継の儀）」として伝えられている。

このように、紆余曲折を経て、鏡剣の奏上は踐祚の日の劍璽渡御となり、大嘗に於ける両儀も辰日に移され、中臣の天神寿詞のみが明治の大嘗の節会まで伝統される結果となった。

(2) 辰日節会

天神寿詞が終わると、豊楽院の前庭に陳列されている献上品の目録奏上があり、これで一区切りとなる。

節会では、改めて五位以上の召し立てがあり、先頭の第一の人（貫首）が儀鸞門（ぎらんもん）から進み、自分の版まで練歩して着く。練歩とは、節会の時に行われる作法で、踵を地から離さず踏み定めながら進む歩き方である。他の者は貫首が版に着き終わるのを見て、順次、参進して各自の版に着く。続いて、上卿の大臣が、敷いてある座に着くことを命じる敷尹（しきいん）を伝え、

群臣が一斉に二拝する。これを「謝座の礼」と言う。次に、造酒司の正（かみ）が空の盃である空盞を捧げ、跪いて貫首に授ける。貫首も跪いてこれを受け、一同と共に二拝する。これを「謝酒の礼」と言う。そして、王卿（おうけい：参議以上）が豊楽殿の殿上に昇り、五位以上は顕陽（けんよう）・承観（じょうかん）両堂に、六位以下は観徳（かんとく）・明義（めいぎ）両堂に着く。

こうして群臣たちが座に着くと、巳 1 刻（午前 9 時頃）から供膳の儀があり、白酒黒酒の儀が行われる。白酒・黒酒各八度であったり、三度であったりする。この間、両国からの献上品は群臣に頒賜され、国風の歌舞が奉じられたりする。最後は一同が庭上に降り、一斉に拝舞し、悠紀の膳である朝膳（あしたのおもの）が片づけられる。

天皇は一旦、豊楽殿の清暑堂に還御なさる。次いで未 2 点（午後 2 時頃）、主基の帳に還御し、悠紀と同様に行われる。そして、悠紀の国司以下には禄が給われる。なお、鮮味などの献上品は悠紀だけで、主基の献上は巳日となっていたことから、辰日節会を悠紀の節会とも言う。

(3) 巳日節会

『延喜式』には次のようにある。

“巳日の辰の二点（午前 8 時）に悠紀の帳（みちょう）に御したまふ。三点（8 時半）に御膳（おも）を薦め、次に和舞（やまとまい）を奏し、其の五位巳上（いじょう）を召して饗（あえ）を給ひ、及び六位巳下参入（まい）りて風俗楽等を奏すること、並辰日に同じくせよ。未（ひつじ）の二点（午後 2 時）に主基の帳に御したまふ。御膳を供ずるの後、田舞（たまい）を奏せよ。庶事、前（さき）の儀に同じくし、事（こと）訖（おわ）りて主基国に禄を賜へ。”

巳日の節会では、二献の後に、和舞が雅楽寮（うたまいのつかさ）によって奏された。舞人 10 人、歌人 10 人、琴師 2 人、笛工（ふえふき）1 人の構成で、舞人は内舎人だった。また、田舞は多治比（たじひ）氏、内舎人などが奏した。

巳日の夜には清暑堂で神宴が執り行われ、神楽や御遊（ぎょゆう：宮中で催された管絃の催し）として催馬楽の安那多布東（あなたふと）や蓑山（みのやま）が唱和された。

辰日と巳日の対照(江家次第)

辰日		巳日	
悠紀帳	天神寿詞 両国多米都物色目奏 宮内省高次枚次物進献 一献悠紀鮮味献進 二献風俗 三献和琴挿頭花進献	悠紀帳	一献風俗 二献和舞 三献
主基帳	一献風俗 二献風俗 三献	主基帳	一献主基鮮物献進風俗 二献田舞 三献和琴挿頭花進献
悠紀見参奏並賜禄		主基見参奏並賜禄	

(4) 豊明節会

豊明節会は、毎年の新嘗祭では卯日の翌日（辰日）に、大嘗祭では午の日に行われた。御宴一般のことも豊明と呼ばれたが、後には大嘗祭・新嘗祭の節会だけの呼称となった。場所は豊楽殿で、御座には御帳を徹して中央に高御座（たかみくら）が設けられ、殿前には舞台が整えられた。

午前 8 時、天皇が出御して高御座にお着になると、続いて群官が入り、庭上で謝座、謝酒の礼を行い、殿上の席に着く。次に、両国の国司と功労者の叙位が行われ、叙位の宣命（せんみょう）が下される。宣命は参議が宣命大夫を務め、天皇から賜った宣命を宣読する。内容は、両国国司以下をねぎらい、位を上げる旨を主とし、文武官中の功績者の叙位に及ぶ。次いで、式部・兵部の二省から位記（いき）が伝達され、位を叙された人が拝舞して退出。その親族も下殿して親族拝を行い、叙位が終わると饗宴となる。

まず采女の奉仕に依り、天皇はじめ皇太子の饗膳が供され、臣下の饌も大膳職によって整えられる。一献の間に吉野の国栖が歌笛を奏して御贄を献上し、二献に及んで伴・佐伯両氏が率いる舞人の久米舞があり、三献中に阿倍氏に依る吉志舞（きしのまい）がある。その後、両国国司が率いる歌人・歌女に依る風俗舞があり、五節舞となる。この舞では、まず大歌（おおうた）が数曲奏される。大歌とは、宮中の大歌所によって採用され伝授された日本古来の催馬楽や神楽歌、風俗歌である。その後、舞台で舞姫 4 人に依る舞が行われる。

五節舞が終わると、群臣一同に依る庭上での御礼の拝舞があり、次は雅楽寮によって立って行われる。立歌（たちうた）がある。そして、解斎のための和舞が神服女 4 人によって奏される。この時、人々に柏が配られて、その柏で酒を受けて飲み、飲み終わると、柏を蔓（かづら：髪飾り）として和舞を舞う。以上が終わると、再び宣命が宣読される。

こうして、禄を受けた親王以下が再拝して退出、天皇が還御なさり、大儀は終了となる。ここに於いて、天皇は皇祖の祭祀を受け継がれ、その霊徳を新穀を通じて親自らのものとし、諸臣にも分かち、皇位を無窮のものとなさるのである。

10：文献

大嘗祭の基礎資料は『貞観儀式』と『延喜式』である。それぞれに踐祚大嘗祭の特記がある。私撰の儀式書としては『西宮記』『北山抄』『江家次第』があり、卜部家代々の家伝を集めた『宮主秘事口伝抄』などもある。

大嘗祭の解説書とでも言うべきものに、一条兼良の『御代始和抄』、荷田在磨（カダノアリマロ）の『大嘗会儀式具釈』と『大嘗会弁蒙』があり、『大嘗会儀式具釈』は桜町天皇の大嘗会の次第に註釈を加えたもので、その抄が『大嘗会弁蒙』である。

大正・昭和・平成の大嘗祭を知るには、『大正大礼記録』『昭和大礼要録』『平成大禮要話』がある。

11：大嘗祭までの流れ

以上、『神社のいろは 要語集 祭祀編』（扶桑社）からの紹介と考察だが、最後に、時代によって流れが異なっている部分もあるが、今上（平成）陛下の大嘗祭までの流れを説明する。（主に Wikipedia より。）今上陛下とそれ以前の天皇とで最も異なる点は、即位礼も大嘗祭も京都ではなく、東京で行われたことである。

・昭和 64 年 1 月 7 日：昭和天皇崩御・新帝即位

天皇崩御後、直ちに皇嗣（基本的に皇太子）が即位。即位とは、基本的には皇位に就いたことを天下に布告することなので、正式な即位は即位礼後となる。しかし、現在では先帝崩御後に皇位を争うことは無いので、皇太子が皇位を継承したことを明示すること。

・同日：内閣総理大臣謹話・剣璽等承継の儀・新元号制定

剣（草薙神剣の写し）、璽（八尺瓊勾玉）、国璽（国家の印章）、御璽（天皇の印章）を侍従長が新天皇の前にある机に置く短い儀式が、皇位継承後間もなく、10 時頃より宮殿正殿松の間で行われ、践祚（剣璽等を継承すること）の旨が告げられた。

・同日：皇霊殿神殿に奉告の儀

皇室の先祖代々の皇霊を奉る皇霊殿及び天神地祇を奉る神殿に於いて、新天皇の践祚を奉告する儀式。剣璽等承継の儀が執り行われているほぼ同時刻に、宮中三殿に於いて、掌典長が新天皇の践祚を奉告した。

・同 1 月 9 日：賢所の儀

賢所に御神体として奉られている八咫鏡の継承儀式。

・同日：即位後朝見の儀

践祚後の新天皇が初めて首相らに言葉を述べる国事行為。

・平成元年 2 月 24 日：大喪の礼・斂葬の儀（葬場殿の儀・陵所の儀）

大喪の礼は新宿御苑にて国事行為。斂葬の儀は皇室の行事。

・平成 2 年 1 月 23 日：賢所・皇霊殿・神殿に期日奉告の儀

神宮・天皇陵等に勅使発遣の儀

・同 1 月 25 日：神宮・神武天皇・前四代天皇陵奉幣の儀

・同 2 月 8 日：斎田点定の儀

・同 8 月 2 日：大嘗宮地鎮祭

・同 9 月 27 日：斎田拔穂前一日大祓（悠紀田：秋田県五城目町）

・同 9 月 28 日：斎田拔穂の儀（悠紀田）

・同 10 月 9 日：斎田拔穂前一日大祓（主基田：大分県玖珠町）

・同 10 月 10 日：斎田拔穂の儀（主基田）

・同 11 月 12 日：即位礼当日賢所大前の儀

即位礼当日皇霊殿・神殿に報告の儀

即位礼正殿の儀（国事行為）

祝賀御列の儀（オープンカーでのパレード、国事行為）

- ・同 12 日～15 日：饗宴の儀（国事行為）
 - ・同 11 月 13 日：園遊会・内閣総理大臣夫妻主催の晩餐
 - ・同 11 月 16 日：神宮に勅使発遣の儀
 - ・同 11 月 18 日：一般参賀
 - ・同 11 月 20 日：大嘗祭前二日御禊・大祓
 - ・同 11 月 21 日：大嘗祭前一日鎮魂の儀・同大嘗宮鎮祭
 - ・同 11 月 22 日：大嘗祭当日神宮に奉幣の儀
大嘗祭当日賢所大御饌供進の儀
大嘗祭当日皇靈殿・神殿に奉告の儀
大嘗宮の儀・悠紀殿供饌の儀
 - ・同 11 月 23 日：大嘗宮の儀・主基殿供饌の儀
 - ・同 11 月 23 日～25 日：大饗の儀
 - ・同 11 月 24 日：大嘗祭後一日大嘗宮鎮祭
 - ・同 11 月 27 日～28 日：即位礼・大嘗祭後神宮に親謁の儀
 - ・同 12 月 2、3、5 日：即位礼・大嘗祭後神武天皇・前四代天皇陵親謁の儀
 - ・同 12 月 3 日：茶会
 - ・同 12 月 6 日：即位礼・大嘗祭後賢所・皇靈殿・神殿に親謁の儀
即位礼・大嘗祭後賢所御神楽の儀
 - ・同 12 月 10 日：天皇陛下御即位記念祝賀会
- ・平成 6 年 11 月 20 日：御袍更衣の儀
即位礼の際に天皇がお召しになったのと同じ黄櫨染御袍を、広隆寺の聖徳太子像に着せる儀式。

＜広隆寺の聖徳太子像＞

何故、広隆寺の聖徳太子像に、即位礼の際に天皇がお召しになったのと同じ黄櫨染御袍を着せるのか？一般的には、聖徳太子には皇位継承権があったから、などと言われているが、ならば、他にも皇位継承権のあった皇子は多くいるので、聖徳太子だけを特別扱いしているのは辻褄が合わない。以下、＜日本の真相 4＞＜日本の真相 5＞をベースとして再考察する。

広隆寺は秦氏の拠点となっているものの、かつては海部氏の領地だった。また、広隆寺は秦の始皇帝の祖霊を祀ったとされるが、始皇帝の命で不老不死の妙薬を求めて渡来した徐福の一派は海部氏に婿入りして物部氏となり、中でも重要な一族は葛城氏となって、海部氏の兄弟分家である尾張氏と共にヤマトで祭祀を行っていた。その葛城氏の流れを汲むのが蘇我氏であり、蘇我氏は聖徳太子の時代、政権を支えた。

他に、広隆寺には国宝の弥勒菩薩半跏像があるが、これは新羅様式である。新羅の建国には海部氏の祖の瓠公（ココウ）や脱解王（ダツカイオウ）が深く関わっている。

すなわち、広隆寺の聖徳太子像とは、邪馬台国の大王家たる海部氏を暗示するものであり、それに即位後の黄櫨染御袍と同じものを着せることにより、大

和朝廷の皇統の現皇室だけではなく、前大和朝廷の統一王国＝邪馬台国の皇統たる王家もまた、この国で維持されていることを暗示しているのである。

この太子像は太子 33 歳の頃と伝えられているが、“33”は「生命の樹」の隠されたセフィラ「ダアト」も含めたセフィロトとパスの数であり、「生命の樹」を暗示する。その「生命の樹」はイナンナが掛けられて死に“復活”した木であり、イナンナが原型のイエスも関わる。確かに、聖徳太子は厩戸（うまやど）の前で生まれたとされ、イエス誕生の逸話とそっくりである。また、弥勒菩薩はマイトレーヤーで、将来出現するとされる弥勒＝救世主であり、これもイエスの再降臨と同義である。また、太子を支えた蘇我氏にも、わざわざ“我、蘇る”という字を充てているのも同義である。

マイトレーヤーは、古代ローマなどではミトラ神とされた。ミトラ神は“牛を屠るミトラ”というモチーフでしばしば描かれていたが、これはミトラが聖牛を殺したことにより、その体から豊穡の種子がほとぼしり出たという神話に基づく。

元々、ミトラ神は古代インド・イランのアーリア人が共通の地域に住んでいた時代まで遡る太陽神かつ契約の神だった。この地域の創造神は豊穡神イナンナであり、イナンナと双子のウツは太陽神で律法の神だから、ミトラはイナンナとウツが合体したような神である。

このミトラ神の牛に関わる変わった祭りが広隆寺にはある。牛祭（うしまつり）である。明治以前は旧暦 9 月 12 日の夜半、広隆寺の境内社であった大酒神社の祭りとして執り行われており、現在では、10 月 12 日に行われるようになった。（ただし、毎年開催ではない。）

白い仮面を着けた摩多羅神（マタラシン）が牛に乗り、四天王と呼ばれる赤鬼・青鬼が松明を持ち、それに従って四周巡行し、薬師堂前で祭文を独特の調子で読むが、参拝者がこれに罵詈雑言を浴びせる。そして、祭文を読み終わると、摩多羅神と四天王は堂内に駆け込む。言わば、牛を追いやる祭りだが、このマタラはミトラの転化であり、牛を屠っていた物部氏にも通じる。

摩多羅神は天台宗の本尊で、阿弥陀経と念仏の守護神ともされる神だが、仏典には登場しないし、記紀などにも登場しない正体不明の神である。しかし、ミトラの転化であるならば、ミトラ神は光明神であり、阿弥陀如来も光明神だから矛盾しない。

また、祭りでは摩多羅神の白い仮面、赤鬼・青鬼の鬼面が使われるが、同じく天台宗系の白蓮教（唐代三夷教の 1 つであるマニ教と弥勒信仰が習合したもの）では、過去仏＝青陽会、現在仏＝赤陽会、未来仏＝白陽会という考えがあることからすると、過去は青、現在は赤、未来は白となる。つまり、白い仮面の摩多羅神は未来仏に相当し、弥勒は未来に出現するとされているから、摩多羅神は弥勒＝ミトラとなり、矛盾しない。



<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/usimatur.html>



なお、白蓮教の創始は南宋で、南栄が始まったのは1127年、牛祭が始まったのは1012年で、時代が合わない、という反論もあろう。しかし、白蓮教はマニ教と弥勒信仰が習合したもので、日本の大乘仏教は極めてマニ教的なものだから、基となる考えは南宋よりも古い時代から大陸に存在したと言え、弥勒信仰と習合した宗教として顕現したのが南栄時代なのであり、それ以前に日本へ考え方が伝わっていてもおかしくなく、矛盾を生じるものではない。

<http://kojiki.imawamukashi.com/05kosatu/05koryuji2.html>

以上、広隆寺はイナンナが原型のミトラ神＝弥勒がベースにある海部氏系の寺であり、故に、そこにある聖徳太子像は邪馬台国の大王家だった海部氏を暗示するものである。